最近のR. H. トーニー研究について

森　本　義　輝

1970年に入ってから，トーニー研究はかつての経済史研究上でのジェントリ論争の平面から，社会思想もしくは政治思想における全人格的な評価へ移ってきた。その傾向はしかし新しい傾向であるというよりは復古的なものというべきであるかもしれない。大正時代および昭和初期にはトーニーは『獲得社会』(1920年)『宗教と資本主義の興隆』(1926年)という社会思想および社会哲学上の著作を通して日本の思想界や知識人に紹介されはじめたのであり，またイギリス労働党およびフェビアン社会主義の潮流における活躍によって印象づけられてきたからである。さらにマックス・ウェーバーの提起した宗教と経済の相互影響に関するテーマに関連して紹介され批判の対象とされた過去もある。ここに紹介するJ. D. チェインバース，J. M. ウィンタ，R. テリル3者のトーニー論はこれらをすべてふくめてトーニー思想の根底についてその歴史的社会的意味を問おうとするもので，総括の感じがきわめて強い。

(1)　チェインバースの1971年論文「トーニーの伝統」[1]は1968年経済史協会における第1回トーニー追悼講演の記録であり，チェインバースという人の文明論的思考が濃厚にでているものである。本稿でとりあげた3者に共通していることであるが，トーニーの思想形成期においてだれがどのような影響を与えたかが最初に考察されている。チェインバースはベイリオルでのエドマンド・ケァードおよびA. L. スミスにうけつがれた学問的雰囲気が決定的としているが，そこはT. H. グリーンとA. J. トインビィの伝統が強固に残されたところであり，さらに神学および社会思想の面で重要な影響を与えたのはチャールス・ゴアという人物であったとする。

チェインバースはトーニー史学の根底にある主要関心を「16・17世紀における伝統的なキリスト教諸価値の俗世化」[2]の意識であるといい，中世キリスト教の俗世化がいつ起こったかについてトーニーはウェーバーを否定して宗教改革がくる以前に，そのはるか以前に行われたとする見解をとっていたが，このトーニー説を正当としている。トーニー自身はその俗世化過程を「競争と個人主義にもとづく獲得(本能にもとづく)社会の形成過程」[3]としてとらえ，いわゆる資本主義の成立を分析したが，その基本的視角は社会科学ではなくてキリスト教的モラリストとしてのそれによって「変化のメカニズムよりは動機の分析」[4]に重点をおいた。したがってトーニーの経済史学は「社会における人間の条件を説明する方法」[5]であり，政治史はほとんど触れられず，一定の抽象化をおこなう研究方法[6]をしりぞけ，経済成長のメカニズム分析は経済史の内容に容れる余地をもたなかった。このことは経済史という方法に対してユニヴァーサルなテーマを課することになり，平等思想の東洋と西洋における意味というような広汎な問題提起が必要となり，ここからしてヨーロッパ中心史観に局限されて終ったトーニーへの批判がだされている。平等は1931年刊のトーニーの主要作品の基本テーマであり，それはまた社会主義イデオロギーの中心に位するものであるが，チェインバースによれば平等思想はグンナー・ミュルダール[7]にひきつがれて非ヨーロッパ世界へと適用が拡大されていると考えられる。

「法の進歩に反映された経済的側面の研究」[8]の必要，さらに中世ヨーロッパ都市およびカトリック教会が経済進歩および近代科学思惟に貢献した事実[9]の指摘については「トーニーの伝統」というよりか「経済史学の伝統」と呼ぶ方が適切であるかもしれない。ブレンターノおよびゾムバルトに対するウェーバーの過去の論争の尾をひいて，改めてチェインバースはトーニー・ウェーバー問題 thesis と名称づけて再検討の必要を提案している。トーニー・ウェーバー問題はつぎに紹介するウィンタによって政治と倫理の関連性の問題を内容につけ加え

1) J. D. Chambers, "The Tawney Tradition," *The Economic History Review*, 2nd Ser., Vol. XXIV, No 3, 1971.

2) *ibid.*, p. 356.

3) 4) *ibid.*, pp. 356–7.

5) *ibid.*, pp. 357—8.　6) *ibid.*, p. 364.

7) *ibid.*, p. 360. G. Myrdal, *Economic Theory and the Under-Developed Regions*, 1957.

8) *ibid.*, p. 361.　9) *ibid.*, pp. 361–2.

て論じる必要がでてきたように思われる。

16・17世紀イギリスは「トーニーの世紀」と呼ばれるくらい，経済史研究上のトーニーの業績は輝かしいものをもっているが，それ以上の意味，すなわち新しい文学を創造したというのがチェインバースの評価である[10]。しかしトーニー晩年の大作『クランフィールド論』の執筆動機を分析し，1950年代のトーニーを穏健なオプチミズム(楽天主義)に傾いたとみて，これを第一次世界大戦前の労働不安期のラディカルな立場と一致していないと疑問をだしている。

このほかチェインバース論文では，トーニーの伝統の方向づけを与え，経済史研究の方向を単なる数量分析にとどめないで，ヒューメインな研究に向けている点を評価しその線上にあるものとして人口統計学の2業績をあげている[11]。「社会主義者であったトーニーにとって問題は所有の数量ではなくて，生活の質が基準とされた」が，その実践がE. P. トムスンの研究であったと評価する[12]。結びはアンウィンの「経済史の目的」にたちかえり，「歴史の中心かつ窮極の目的は人間の内面において保有するものと体験を発展させることであり，宗教・芸術・文学・科学・音楽・哲学など人間がお互いの精神や魂のコミュニケーションをどこまでも広くかつ深くしていくことにある。」[13]として経済史の源流をそこに見出している。

(2)　ウィンタは「R. H. トーニーの初期政治思想」(1970年)[14]，「R. H. トーニーの著作目録」(1972年)[15]，『R. H. トーニーの覚え書』(1972年)[16]の3つの業績をもっている。「著作目録」はトーニーの書いた単行本・論文・パンフレット・雑文・批評・序文・寄せ書などを整理し通しナンバー499まで打って目録とした。『覚え書』は急死したD. M. ジョスリンに代わって，トーニーが発表を意図しないでメモした1912—1914年の日記を公刊したものだが，ウィンタのものと思われる解説が序文としてつけられている。

「初期政治思想」は第一次大戦前のイギリスにおけるトーニーの思想形成期の政治理論と政治実践の特質を歴史学的に解明した論文で，上記『覚え書』はその有力な資料として用いられている。その時期つまり労働不安の時代にトーニーは労働者教育協会W. E. A. のテューター(教師)として労働者教育の実務についていたが，『16世紀の農業問題』を刊行するとともに「民主教育のひとつの試み」(『急進主義の伝統』所収)をすでに発表して人生の主たる方向を経済史研究および労働者教育に捧げることを決定していた。ウィンタは職業の選択と思想形成の両面からキャノン・バーネットの影響を重視し，アンウィンとの出会いを強調する。W. E. A. がそれ以後におけるトーニーに与えた影響については，およそトーニーが社会主義を問題にし労働者を口にするときは必ず，テューター学級の生徒をモデルとして心に描いていた，それほど深くかつ大きい意義があるとウィンタはいう[17]。教育に対するトーニーの考え方は，すべて人間は神の前では無限に卑少なものだから平等なはずであり，資本家の物質主義にもとづく価値観によって堕落させられている，それがイギリス人の教育制度であるという見方で一貫していたが，さらに教育は多くのレベルに分かれておりそのすべてのレベルにわたる変革は社会改革のため，すなわち社会主義実現のための重要な鍵をにぎっているという意味の特殊な重要使命を帯びるものとして認識されている。この教育の重要視はトーニーのユニークな面であるとともに弱点と偏向をも生ぜしめた。

またウィンタはこの戦前の時期におけるトーニーを，すでにフェビアン協会員でありながらウェッブ夫妻の指導理念，ことにその戦略と戦術に対するラディカルな批判者としてとらえ，ウェッブは根本理念において旧型であり，委員会や政党などの機構いじりと操作に集中し，社会主義の真の主体となるべき大衆男女の一人びとりを無視してしまっている[18]。社会変革の鍵をにぎっているのはつねに個人より成る大衆であり，大衆の意識の変革こそ社会主義の理論と行動の基礎をなすという確信にもとづいていた。トーニーの革命観によれば，労働不安という産業社会の矛盾は社会の外面的秩序の問題としてと

10)　*ibid.*, pp. 363–4, 368.

11)　J. Hajnal, *European Marriage Patterns in Perspective*, 1964 ; M. K. Hopkins, *The Age of Roman Girls at Marriage*, 1963.

12)　"Time, Work-Discipline, and Industrial Capitalism", *Past and Present*, XXXVIII, 1967,

13)　G. Unwine, Tawney ed., "Studies in Economic History," 1927, p. 3.

14)　J. M. Winter, "R. H. Tawney's Early Political Thought," *Past and Present*, No 47, 1970.

15)　"A Bibliography of the Published Writings of R. H. Tawney," *The Economic History Review*, 2nd Ser., Vol. XXIV, No 1, 1972.

16)　"R. H. Tawney's Commonplace Book," Cambridge Univ., *Economic History Review Supplement 5*, 1972.

17)　"R. H. Tawney's Early Political Thought," *op. cit.*, p. 75.

18)　*ibid.*, p. 71.

らえられずに内面的あるいは道徳上の悪の自覚をもって認識されていたが，社会制度や経済組織のドミナント・パターンと「人が道徳的に正義であると考えたこと」との間の矛盾が社会的に自覚されはじめたことが労働不安の真の意味であるという見解が『覚え書』で告白されており[19]，要するに労働不安は準備の時期であること，またこの時期の労働運動に総体的に否定的評価を下している[20]。大規模な社会矛盾はトーニーの眼からみると道徳基準の背反を表わしているとともに，そこにみられる不正や圧迫は集産的な道徳上の過失であり，これについては社会の構成員の全部が責任を分かち合わねばならぬものとされている[21]。現実政治に倫理道徳は通用しないと考えているかにみえるウィンタは，トーニーの弱点を批判しながら「美辞 Rhetoric を政治行動へ転形する過程」がトーニーには欠けていたという[22]。これはまたトーニー・ウェーバー問題の重要テーマでもある[23]。

(3)　ロス・テリルの『R. H. トーニーとその時代』(1973年)[24]はハーヴァード大学版で「フェロウシップ Fellowship としての社会主義」という副題をもっている。著者テリルは中国研究者であり，かつ政治評論家としてもジャーナーリズムで活躍中のひとであり，主著『8億の人民，中国のほんとうの姿はこれだ』(1971年)[25]がある。テリルのトーニー研究は総合的全人間的かつ歴史的社会的な背景においてとらえようとしているという点で，上記2人のイギリス人の研究にくらべてはるかに情熱的で大規模な調査研究となっている。付録の著作目録にしてもウィンタ目録よりは多くなり572となっている。このことだけでもトーニー研究は進展しつつあると考えてよいであろう。テリルの方法は文献だけに頼ったものではない。それはさながらトーニー史学の方法を地でいくように，面接調査も精力的に行い，生存している同時代人への個人あての書簡や影響をうけたとみられる学者・ジャーナリスト・政治家など個人のほか，研究機関・図書館など公共機関なども訪問し，聞きとり活動が行われており，伝記としても高い水準となっている。その構成は第1部トーニーの生涯　第2部トーニーの社会主義　第3部現代におけるトーニーの3部に分かたれ，ほかに序文・資料の出所・著作目録・注釈などがついている。

第1部は　(1) 道徳形成 1880—1914年　(2) 社会主義者としての政治活動 1915—1931年　(3) ホートン街の紳士 1932—1942年　(4) 聖人 1943—1962年の4つに区分され，年代記ふうの書き方をさけてイギリスという政治経済社会の条件規定を重視して，それとの関連のもとにパースナリティの形成をみようとしている。

トーニーについてテリルの関心をそそったものはいったい何であったか。かれはいう。トーニーが生きそして紡いだ年月にはイギリスではまことに多くの思想や主義が生まれ活動し傷つきたおれた，と[26]。しかもそのような時代におけるトーニーの「金剛石の碑」[27]のような一貫性と活動の多面性がある，それはいったい何にもとづくか，これがテリルの関心であるのだが，その特質についてテリルは「同時代における社会的自覚」[28]と「対応する責任」[29]にその解明の鍵を見出すのである。テリルはそのようにして形成されたトーニーの社会主義を独自の型の社会主義として組織的に再建する意欲において本書を書き，そこでとりだしたのが「フェロウシップとしての社会主義」であった。本書におけるテリルの最大の関心は現代においてトーニー社会主義の本質を再構成することであり，単にトーニーの生涯や業績を回顧することではない。

第2部はフェロウシップの分析である。中心概念を4つに分けて　(1) 権力の分散　(2) 平等　(3) ファンクション，サーヴィスと目的　(4) 市民性，とする。テリルはこの概念を M. アーノルドの提起した「階級を超えたコミュニティ全体」という文化概念とトマス・H・グリーンの「社会サーヴィス」という2つの概念のブレンドであるとみる[30]。トーニーには階級分裂の現実認識はあるが階級斗争の志向はなく，むしろ階級分裂を克服し社会を統一する志向が明確であり，それが16世紀イギリスに向けられたかれの歴史意識の中核でもあった。階級斗争をめざすものではないから共産主義と異なり，さらに自然状態への回帰というジャン・J・ルソーと逆方向であるとともに W. モリスの「天国」のような無政府主義とは秩序と義務を重視する点で正反対であり，E. M. フォスタの「隠者」というような大衆に背を向けた宗教的懐疑主義や L. ウールフの知識人ふうの敗北主義

19) *ibid.*, pp. 76–7, 81,『覚え書』6 May 1912, 10 June 1912. etc.
20) *ibid.*, p. 82; "Tawney-Vyvyan Papers."
21) *ibid.*, p. 83ff.　22) *ibid.*, p. 94.
23) *ibid.*, p. 95ff.
24) Ross Terrill, *R. H. Tawney and His Times——Socialism as Fellowship*, Harvard Univ., 1973,
25) *800,000,000, The Real China*, Atlantic-Little, Brown and Campany, 1971.
26) Ross Terrill, *op. cit.*, p. 5.
27) *ibid.*, p. 6.　28) *ibid.*, p. 7.
29) *ibid.*, p. 10.　30) *ibid.*, pp. 210–1.

とも異なるものがある[31]。定式化すれば「自由で平等な個人の公正な関係としてのフェロウシップ」[32]ということになるが「純粋の政治概念」[33]であるとともにヒューマニスティクな社会主義へいたる1つの鍵として「open-ended な過程としての歴史の概念」[34]でもあるとされている。

第3部現代におけるトーニーは非難され易い弱点 vulnerabilities およびトーニーの重要性の2つに分かれ，テリルのトーニー批判と同時にトーニー社会主義に寄せる期待を分析的かつ説得的にのべてある。「非難され易い弱点」はさらに (1) トーニーのいう共通目標 Common ends の不明確さ (2) ブリテンと世界 (3) マルクス主義の変化した位置 (4) 政治，合理性そして制度上の変化 (5) キリスト教信仰の役割の減退の5項についてトーニーへの疑問を集約する。

1950年代のはじめアトリ労働党内閣が退陣したとき，その後の労働党と社会主義の進むべき方向が問題になった。トーニーはその討論キャムペインに積極的に参加し「ブリテンの社会主義者の進むべき道」(1952年，『急進主義の伝統』所収)で政治不信の傾向を警め，福祉国家という集産主義の達成した成果を高く評価し，その力を軽視すべきではないといっている。しかし1953年になると，かれはアトリ批判と集産主義への批判というかれ本来の立場を強くおしだした[35]。テリルが高く評価したのはこの局面におけるトーニーである。集産主義に対する批判はトーニーが終生所属していたフェビアン協会の理念に対するラディカルな批判であり，またマルクス主義に対する批判であり，そしてファシズムに対する批判でもあったのだが，現象面では官僚主義，無感覚(生気が抜ける)，物質中心主義，社会主義の歪曲，などの傾向としてあらわれるものに対してその原因は労働者大衆から学ぼうとしなかったからであり，労働党がその沈滞から立ち直るただひとつの道は人民を信頼することであると叱正した[36]。

マルクス主義との関係についてはトーニーその人の思想についても問題があるが，テリルはソビエトの建国によるマルクス主義そのものの位置の変化の問題，そして思想形成期(コミンテルンによるイギリス共産党結成以前における)のトーニーとマルクス主義の親和関係について新事実の掘り起こしを行ったことが指摘されねばならない。フランス革命の検討である「新レヴァイアサン」というノートの活用[37]および W. E. A. のテューター学級の学生にマルクス主義者が多かったという事実の指摘[38]がそれである。トーニーによるソビエト批判はスターリン主義批判[39]であったが，ファシズムおよびスターリン主義という両面からの圧迫の解消された今日すなわち1970年代はトーニー社会主義がその真価を発揮できる機会であるという期待をテリルはいだいている。

最後に本書は「トーニーの重要性」でしめくくられる。ここは (1) 資本主義に反対した範例 (2) 横暴な資本主義と権威主義に対する斗い (3) 集産主義に対する挑戦 (4) キリスト教信仰と社会主義 (5) ヒューマニスティクな社会主義 (6) ブリテンの社会主義におけるトーニーの立場の6つに分かれる。ここでは E. メイヨおよび P. セルズニックの階級的立場の批判が印象的で，かれらのいう上下の管理体制にもとづく組織論からはフェロウシップはありえないとし，これに対してトーニーの「上と下からの双方からする弁証法」を激賞している[40]。(6)は労働党内部における各派のうちトーニーはどれに属するか，の問題である。いちおう左派 Non-Marxist Ethical Socialism of the Labour Left[41]であるが，ベヴァン左派，ゲイツェルおよびウイルスン右派，ギルド社会主義者，マルクス主義者，フェビアン主義者，キリスト教社会主義者をふくむすべてのグループにつながりをもつといわれる。

トーニーの弱点と欠点はすでに明瞭である。それはチェインバース，ウィンタ，テリルの3者によって説明されつくした感が深いが，それにもかかわらずなおトーニーが現代において有効性をもつとしたら，テリルがのべている資本主義，権威主義，集産主義の3悪に対する挑戦[42]に集約できるけれども，政治と宗教，経済と宗教など現実政治に対する問題性において意義を有するのではなかろうか。

(秋田経済大学)

31) *ibid.*, pp. 210–3.　32) *ibid.*, p. 217.
33) *ibid.*, p. 262.　34) *ibid.*, p. 270.
35) *ibid.*, pp. 258–9.　36) ibid., p. 260.
37) "The New Leviathan, Notes and Talks on French Revolution," *London School of Economics.*
38) *ibid.*, p. 234.　39) *ibid.*, p. 235.
40) *ibid.*, p. 261.　41) *ibid.*, p. 277.
42) *ibid.*, p. 250.